

鈴鹿本『今昔物語集』における「アフ」を表す漢字の用法について

刀 田 絵美子

1. 研究の目的と方法

現代語では、「アウ」の用字法が凡そ次のように把握されている。

【現代語の「アウ」の用字法^{*1}】

〔合う〕 ぴったりとあわせる。

〔気が合う〕 「服に体が合う」「計算が合う」

〔会う〕 人と人とが顔を合わせる。人が集まる。

〔客と会う〕 「仲間と広場で会う」

〔逢う〕 男女が顔を合わせる。「公園で恋人と逢う」

〔遭う〕 出くわす。好ましくないものにあう。

〔交通事故に遭う〕 「にわか雨に遭う」

〔遇う〕 思いがけなく出あう。「幸運に遇う」「偶然に遇う」

一方、日本語の歴史のなかで捉えらるるとするならば、どのような用字法であったのだろうか。

本稿では、鈴鹿本『今昔物語集』における「アフ」の用例を帰納し、用字法を確認することで、「今昔物語集」という限られた範囲で、先に示した疑問にこたえていくことを目的とする。

『今昔物語集』は、高等学校の古典教材として、広く取り上げられる作品である。現代語、古語のどちらも扱う国語科教師が用字法を把握しておくべき作品として、取り上げる価値があると考え、研究の対象とした。

『今昔物語集』の中でも、鈴鹿本は現存最古の写本であり、原本に近い資料と言われる^{*2}。また、書写年代である院政・鎌倉時代の言語資料としても有用であると考え、本稿で取り上げることとした。^{*3}

調査は、国文学研究資料館が公開している日本古典文学データベースを利用し、『今昔物語集』のうち鈴鹿本を底本とする巻で、漢字を検索した。各漢字のうち、山田孝雄他校注『今昔物語集一〜五』で、「アフ」（ハ行四段活用動詞）と訓読する用例を研究の対象とした。また、『今昔物語集漢字索引』などでも重ねて調査した。

なお、山田孝雄他校注『今昔物語集一〜五』によると、調査範囲の「アフ」には異同がない。

2. 鈴鹿本『今昔物語集』における

「アフ」の表記と用法

2.1 「アフ」の表記

鈴鹿本『今昔物語集』において、「アフ」の表記として確認できたのは、値(二一九例)、會(五二例)、遇(十三例)、合(十例)、遭(二例)、逢(二例)、相(二例)の七漢字および、仮名表記(二例)であった。

2.2 「アフ」の用法

鈴鹿本『今昔物語集』における「アフ」の用例を帰納し、類型を試みる。その際、磯貝2003で示された、用法(〈逢会〉〈結婚〉〈遇機〉〈拮抗〉〈合致〉)を踏襲しつつ、細分化した。^{*6}以下に、鈴鹿本『今昔物語集』で確認できた九用法(a~i)を示すと共に、当該漢字に傍線を付して、用例を掲げる。用例に続いて、巻及び説話番号を括弧で示す。

なお、以下に掲げるすべての用例は、山田孝雄他校注『今昔物語集一〜五』を参考に、訓点を施した。また、説話番号も同書による。

〈逢会〉—— 人等に出会いあたる^{*7}

〈結婚〉—— 男女(雌雄)が結び付く

a (会)いたいたいと思ひ、人などに) あう

・結縁セムガ為ニ、彼ノ山ニ行テ聖人ニ會テ(卷十二・三十六)

b 男女が関係を結ぶ。転じて、結婚する

・簾ノ外ニ出テ、相如ニ會ヌ(卷十・二十六)

c (偶然、人などに) あう

・此ノ和尚昔シ廁ノ前ニシテ一ノ鬼ニ値フ(卷七・二十一)

d 来あわせる^{*8}

・其ノ郡ノ御合ノ郷ニ二人ノ乞者ノ僧値ヘリ(卷十二・二十五)

e (仏・如来など)にあう、転じてそれと) 縁を結ぶ

・仏ニ遇奉テ道ヲ得ゾ(卷二・三十)

〈遇機〉—— 機会・時節等、また災難など好ましくない事態に

めぐりあたる

f 季節・時に巡りあう。(転じて、それに乗り) 栄える

・其ノ災ニ不預スシテ太平ニ値テ富貴ニ至レリケリ(卷七・二十八)

g 災いなど、悪い出来事に遭遇する。

・十余人皆其ノ難ニ値テ身振ヒ心動テ(卷十二・十六)

〈拮抗〉—— 同じような程度に並ぶ

h (軍・敵に) 立ち向かう、力を比べる。

・彼ノ人ハ力強ク心武キ人也汝不可合ヌ(卷第一・三十)

〈合致〉—— 複数のものが一つにあわさる、一致する

i 一致する

・汝カ持タル半鏡飛ヒ来テ我カ半鏡ニ可合シ(卷第十・十九)

用例を、用法ごとに整理し、用例数を、表に示す。

(表) 用法別漢字分類

相	逢	遭	合	遇	會	値	意		逢	會	結	婚
							a	b				
			3	2	27	6	a	b				
1	1		1	6	12	66	c	d				
				3	1	30	e					
				1	1	2	f					
		1		1	3	15	g					
			4		1		h					
			2		1		i					
1	1	1	10	13	52	119						合計

表より、「會」は、用例数の多少はあるにせよ、どの用法でも見られる漢字であることが分かる。その中でも、意志的な「アフ」に用いられる用例が多い。

一方で、非意志的な「アフ」には、「値」が用いられる。また、「遇」も、非意志的な用法で用いられる。

「値」と「遇」を比較してみると、両字とも用法a、cでは、「仏教者」にあう時に用いられる。また用法eで用いられる。

このように、「値」「遇」が、仏教に関する説話で用いられるの

は、仏典を中心に「値遇」という表現で「出会う」という意味を担うことと関係しているだろう。

3. 特徴的な用字法についての検討

本節では、特定の用法と表記の対応が確認できるか、特に用例の多い用法a、用法c、用法gについて検討する。

3.1 用法a（会いたいと思ひ、人などに）あうについて

用法aは、會、値、遇、合で見られる。各漢字がどのような対象について用いられるのか、次に示す。

合	遇	値	會	
1	1	2	22 (男女があう9)	人
	1	2	5	仏教者
				仏・菩薩
		1		鬼神
		1		動物
1	2	6	27	合計

3.2 用法c（偶然、人などに）「あう」について

用法cは、値、會、遇、合、逢、相で見られる。各漢字がどのような対象について用いられるのか、次に示す。

相	逢	合	遇	會	値	
1	1		3	10	15 (盗人(6)相人(2))	人
			3	1	13	仏教者
					仏像(2)地藏(9)	仏・菩薩
		1		1	12	鬼神
					15	動物
1	1	1	6	12	66	合計

3.3 用法g（災いなど、悪い出来事に遭遇する）について

用法gは、値、會、遇、遭で見られる。各漢字がどのような対象について用いられるのか、次に示す。

遭	遇	會	値	
			8	難
		1	2	自然災害
	1		1	苦
1				禍厄
		1	1	中夭
			1	大魔障
1	1	2	13	合計

4. 各漢字の特徴

本節では、3を踏まえて、各漢字の特徴をまとめる。

①「値」

用法a、cを通して、「仏教者」に用いられる例が多い。これは、仏典で「値」が用いられることの影響であろう。

此ノ宿レル僧ニ値ヒ奉ヌレバ（巻十七、用法c）

また、人以外の有情物（「鬼神」「動物」と出会う時に用いられる。これは「値」にのみ見られる。

船主ノ男道ヲ行クニ船ニ乗セシ蛇値ヒヌ（巻五、用法c）
迷ハシ神ニ値テ然テハ、不思議又所ニ来ニタル（巻二十七、用法c）

用例を確認すると、行為の意志性に関係なく、人以外の有情物には「値」が用いられている。一方で、人には、「會」が用いられる例が多い。

このことから、「あう」という行為の意志性とは異なるレベルで、「會」と「値」の違いを述べることができる。つまり、「會」は人に用いられ、「値」は人以外の有情物に用いられる。ただし、人の中で

も、「仏教者」は「値」が用いられる。

用法gでは、「水難」「王難」など、「難」と遭遇するという例が多い。その中には、地藏菩薩が難に遭遇するという例も二例含まれる。また、「中天」「大魔障」という表現からも、仏教的な対象に対して用いられるといえる。

然レバ人自然ヲ王難ニ^④値ハム時心ヲ至シテ佛ヲ念ジ(卷十二、用法g)

②「會」

用法aで最も多く用いられる。特に男女の逢会を表す用例が多い。

女事請シテケレバ、男女ノ家ニ行テ^⑤會ニケリ(卷二十九、用法a)

一方、「仏教者」にあうことは、用例数としては他の漢字よりも多いが、用例数全体に占める割合は、他の漢字よりも少ない。

神明ニ行テ、持経者ニ^⑥會テ、宣旨ノ趣ヲ仰ス。(卷十二、用法a)

③「遇」

先にも述べた通り、非意志的な行為に用いられる点と、「値遇」という漢語に影響を受けた点から、「値」と似た用法である。しかし、「値」と異なるのは、人以外の有情物に対しては用いられないという点である。

其ノ時ニ外道有り。道ヲ行ニ此ノ閻婆羅ニ^⑦遇ヌ(卷一、用法c)

④「合」

単独で「アフ」として用いられる用例が少ないため、明確な特徴が見出せないが、少なくとも、「仏教者」に用いられないという点と、他の漢字が担うことが少ない用法h(立ち向かう、力を比べる)、i(一致する)で用いられるという点に特徴がある。このことは、他動詞「アハス」に「合」が多いことと無関係ではなく、「合」は二つ以上のものを一つにするという意味で用いられる漢字だといえる。

箭橋ノ津ニ行テ海人ニ^⑧合テ此ノ由ヲ語テ(卷十七、用法a)

彼ハ百万人惣テ可^⑨合キニ非ス(卷五、用法i)

汝力持タル半鏡飛ヒ来テ我が半鏡ニ可^⑩合シ(卷十、用法j)

⑤「遭」

『今昔物語集』全体を通して、一例しか用いられていない。依拠文献^{*10}で同じ漢字が用いられており、『今昔物語集』の撰述の際に、依拠文献からそのまま移植されたことが確認できる。

何ナル罪ヲ作テ日来ノ間重キ禍厄ニ^⑪遭テ死テ蘇ラム(卷二、用法g)

⑥「逢」

『今昔物語集』全体を通して、一例しか用いられていない。依拠文献で同じ漢字が用いられており、『今昔物語集』の撰述の際に、依拠文献からそのまま移植されたことが確認できる。

我レヲ捕ヘタル青キ使者、官人ニ逢テ云ク（巻七、用法c）

⑦「相」

接頭辞に多く用いられる。鈴鹿本に現存する巻、現存しない巻のそれぞれで一例ずつ、動詞「アフ」として用いられている。

鈴鹿本で見られる用例は、「生者必滅、会者定離」の訓読的表現として用いられている。依拠文献とされる『大方便仏報恩経第三』ではこの表現を確認できず、^{*12}同文系の説話とされる『三国伝記』『私聚百因縁集』では、「會」が用いられていた。^{*13}

生ル者ハ必ズ滅ス、相ヘル者ハ定メテ離ル（巻二、用法c）

鈴鹿本に現存しない巻には、「我（稿者注*佛）ニ相フ」という用例がある。依拠文献では「遭値於我」となっており、二例の検討から「相」が「アフ」として用いられる場合の傾向を見出すことができない。

5. 教育実践への提言

本稿で得られた成果を、教育実践に活かすとすれば、どのような方法が考えられるだろうか。

本稿の成果からは、「話し言葉に留まらず、書き言葉（用字法）も変遷する」といえる。「今昔物語集」の用字法によって、学習者が持っている規範（現在の用字法）を相対化し、学習者のことばに対する意識・興味を高めることができるだろう。

現代の用字法と異なることで、学習者は戸惑いを覚えるかもしれない。しかし、表面的な違いを指摘することで古典テキストとの距離を感じさせるのではなく、我々と同じように、一定の規範に則って、ことばを書き表そうとした書写者の行為として「今昔物語集」の用字法を捉え直すことで、「ことばを記す」とは、どのような営みであるのかという、学習者の問題に肉薄できるような授業を提案したい。

高等学校の教科書を確認してみると、例えば「値」と表記された箇所が他の漢字に置き換わっていたり、仮名表記に改められたりして掲載されている。^{*14}

しかし、「今昔物語集」には「アフ」の用字法が認められ、それを利用して、学習者のことばに対する感覚を高め得るとすれば、読みやすさを追究して表記を改めてしまうことに対して、憾みが残る。

教科書を利用して、授業を展開する授業者は、そのことを認識し

た上で、表面的な古典の読解に留まらず、古典テキストを利用して、学習者に自己のことは見つめる機会を設定する必要があるのではないだろうか。

6. 今後の課題

本稿では、鈴鹿本『今昔物語集』における「アフ」を表す漢字の用法を明らかにした。概略は次に述べる通りである。

①「アフ」は「値」「會」「遇」「合」の順で多く見られ、「遭」「逢」

「相」は一例ずつ確認できる。仮名は、和歌で表記する場合に一例見られる。

②行為の意志性という観点で用例を分類すると、意志的な「アフ」

には「會」が、非意志的な「アフ」には「値」が用いられている。また、「遇」も、非意志的な行為の場合に用いられる。

③行為の対象という観点で用例を分析すると、「會」は人について、「値」は人以外の有情物について用いられている。

④「遭」「逢」は、依拠文献との関係で出現した可能性が高い。「相」は依拠文献との関係で説明できず、課題が残る。

同時代に書写された他の文献における「アフ」の用字法を明らかにすることを今後の課題とする。

7. 引用参考文献

【文献】

- ・阿辻哲次・一海知義・森博達『何でもわかる漢字の知識百科』三省堂 2002
- ・今野達・小峯和明・池上洵一・森正人校注『今昔物語集一〜五』岩波書店 1993・1999
- ・説話研究会編『冥報記の研究1・2』勉誠出版 1999・2000
- ・中田祝夫・峰岸明共編『色葉字類抄 研究並びに総合索引 索引編』風間書院 1964
- ・前田育徳会編『色葉字類抄』前田育徳会 1984
- ・馬淵和夫監修『笠間索引叢刊 40 今昔物語集漢字索引』笠間書院 1984
- ・正宗敦夫編『観智院本 類聚名義抄 第一巻・第二巻』風間書房 1978・1981
- ・山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄校注『今昔物語集一〜五』岩波書店 1959・1963
- ・安田章編『鈴鹿本今昔物語集 影印と考証』京都大学学術出版会 1997

【論文】

- ・磯貝淳一「和化漢文資料における「アフ」の用字について 和漢

混淆文との比較から」新潟大学教育人間科学部国語国文学会
『新大國語』第二十九号 2003

【データベース】

・国文学研究資料館・日本古典文学大系本文データベース http://base3.nijl.ac.jp/Rcgi/bm/hon_home.cgi
・大正新修大蔵経テキストデータベース <http://21dtk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>

【注】

*1 『何でもわかる漢字の知識百科』より引用。

*2 「加速器質量分析法による炭素14年代測定によって、鈴鹿本の綴じ目に使用されていた最古の紙よりの年代が1018年から1159年であることが証せられた。まさに本書の成立年代と重なる年代である。紙よりだけ前代のものを用いたとは到底考えられない。鈴鹿本は今昔物語集の原本か若しくは限りなく原本に近い写本と断定せざるを得ないようである。」(酒井憲二「鈴鹿本今昔物語集研究史」(安田章編『鈴鹿本今昔物語集 影印と考証』より引用。))

*3 「今昔物語集」における「アフ」の用字法について言及した論文に、磯貝淳一「和化漢文資料における「アフ」の用字について 和漢混淆文との比較から」がある。本論文では、和化漢文資料では漢字と用法の対応が認められるが、漢字仮名交じり文(『今昔物語集』を含む)には認められないことが述べられ

ている。しかし、個別資料における、漢字と用法の対応については述べられておらず、筆者が得た調査結果とは異なるため、本稿を発表することにした。

*4 『観智院本類聚名義抄』と、『前田家本色葉字類抄』を引き、これらの漢字が、中世において「アフ」の意味を担う漢字であると認識されていたかを確認した。

〔観智院本『類聚名義抄』(傍線は稿者による。)]

〔値〕直事反 アタル アフ アツ 和チ(佛上25・4)

〔會〕戸外反 アフ ミル ムカフ カナラス カナフ アツマル ハム ヒタメ タマく 和エ(僧中2・1)

〔合〕胡答反 アハセテ カナフ ヘシ コソル ハカル

アツマル ヤハラカナリ アフ 又音閣(僧中1・3)

〔遇〕音寓 アフ タマく タマサカニ メクル ワツカニ カヘリミル オモフク マイル 和同(佛上57・2)

〔逢〕扶恭反 アフ(佛上60・2)

〔遭〕音槽 アフ(佛上60・1)

〔相〕アフ ニル ミル カタチ タカヒニ トラシ ハケム トフラフ イフ ヲサム ハカル タカシ マサスケ ミチヒク ツチシロ(佛下本113・2)

〔前田家本『色葉字類抄』(反切の省略は稿者による。)]

／會 アフ／遇／相／逢／値 對 觀 遭 …(三十八字省略)：記上(阿 辞字)

*5 仮名表記の用例は、次の一例である。

シデノ山コエヌル人ノワビシキハコヒシキ人ニアハナナリケ
リ(巻二十七・二十五)

他に和歌で用いられる用例はないが、和歌中のことばであるため仮名で表記されたと考えられる。

*6 磯貝2003に示された用法を細分化するにあたり、〈逢会〉

は、動作主の意志が、行為に反映された用例か否かによって、項目を別にした。また、〈遇機〉は、出来事の善し悪しによって、項目を別にした。

*7 磯貝2003の説明による。以下、〈結婚〉〈遇機〉〈拮抗〉

〈合致〉についても同じ。

*8 用法dには、「Aアフ」のように、「ニ」を伴わず「主語+動詞」の構文をとる用例を分類した。

*9 「合」が他動詞「アハス」として用いられる用例は、鈴鹿本に現存する巻全体で、三十七例ある。これは、他の漢字よりも圧倒的に多い。

*10 大正新修大蔵経テキストデータベースで確認した。

*11 前田家本『冥報記』で確認した。

*12 大正新修大蔵経テキストデータベースで確認した。

*13 今野達他校注『今昔物語集』では、「以百因縁集」所収の説話を同文的同話と位置づけるが、翻刻・影印等が公開されておらず、直接確認することができない。ただし、今野達他校注『今昔物語集一』には、「以百因縁集以下、すべて「生者必滅、會者定離。」とある。

*14 例えば、鈴鹿本には現存しない、巻二十八所収の、「信濃守藤

原陳忠、落人御坂語第三十八」(通称「受領は倒るる所に土つかめ」)は、本来「然許ノ事ニ値ヒテ」と表記された箇所が、教科書によって、「会ひて」「遭ひて」「あひて」と表記が改められている。「然許ノ事」とは、足を踏み外して、馬ごと谷に転がり落ちたことを示しており、本稿では用法gに分類できる用例である。用法gは、鈴鹿本では「値」で表されることが多い。鈴鹿本で得られた結果は、大凡、鈴鹿本が現存しない巻でも同じ傾向を示しており、鈴鹿本に現存しない巻であっても、本稿で得られた成果を利用して、「今昔物語集」における「アフ」の用法を説明できるだろう。

*15 例えば、同時代に書写された漢字仮名交じり文で、鈴鹿本『今昔物語集』と同じように、「アフ」を書記する際に、他の漢字よりも「値」を多く使用する文献に金沢文庫本『佛教説話集』がある。しかし、金沢文庫本『佛教説話集』は、「仏・如来などにあう、転じてそれと」縁を結ぶ「場合や、「教・法に巡りあう」場合に「値」を用いることが多く、鈴鹿本『今昔物語集』のように、行為の意志性や、行為の対象の観点からの分析はできない。